

福翁古話（八十一）

福澤 謙吉

衛生の爲めに飲食物の良不良は固より大切なふとなれども一日三度の定置わるに反し空氣の呼吸は晝夜片時も止むとなくして身體に直接の關係は飲食の物に異ならざれば其良否の影響も亦同様にして衛生上に感ずる所は更に大なるを知る可し成は都人士が田舎の生活法を見て不潔なりと云ふものあれども其不潔は唯自警して然るのみ少しく事實に注意するときは都鄙相比較して田舎より却て清淨なるを發見す可し百姓の生活固より粗末にして家の掃除も行困難かす飲食は奥くして衣服は藏し今更ら云ふまでもなき様なれども戸外に出来るみと一步、蒲目の風光消淨無垢にして新鮮の空氣に呼吸す可し然かのみならず百姓の常職は山に行き烟に出で男女老少共に家に居るは簡にして戸外の仕事をみそ忙しければ所謂不潔の家に眠食するは年中の一半に足らず况んや其不潔の家と云ふも唯目に見て不出るみと一步、蒲目の風光消淨無垢にして新鮮の空氣に呼吸すれば他の飲食等の粗を償ふて餘りある可きに於てをや之と彼の下の住人が紅塵百丈の中に家を作りて晝夜二十四時間塵の中に起居し塵の中に往来し塵の中に調理したる物を食ひ塵の中に歸れたる衣服を着ければ都下無敵の人の呼氣、その身體の蒸發を始めて身體の内外恰も汚穢を以て蔽はるものに比すれば同年の倫に非外試に其紅塵なるものゝ性質を吟味すれば勝博の極くものあり、千差萬別種々無量の汚穢不潔の物が或は温熱にむれて蒸發し或は太陽に乾燥して風に飛揚し陰々鬱々半天を蔽ふものは即ち都會の紅塵なりの酒ると云ふも都て紅塵の風に吹かるるものと知る可知し左れば都人が金玉食し大腹高機に住居すと云ふも不愉快を感するも家に居て縁側に障子に又硯なきに埃吟味して化學上に醫學上に其害毒と明にしたらんにする所の金玉のみ一呼一吸間もなく四六時中直接に身に關係して生命の泉源とも云ふ可き空氣の性質如何を其衣食住は汚穢中の衣食住にして金玉は唯是に目と映る所の金玉のみ一呼一吸間もなく四六時中直接に身に等しくして一層無上の常食なりとすれば都會の住人は富豪大豪と雖も百般の汚穢物を常食にして土百姓の食物の清潔無毒なるに及ばざるみと達しと云ふ可し是亦地方に營繕の不自由なるにも拘はらず病人の少ない原因の一箇條なる可し衛生家の宜しく注意す可べし所のものなり

實際に見る可きもの多き中にも外交の一舉の如き著しきものと云ふ可し、一言以て其有様を説明すれば、論り戰勝の結果として小國が大國となりたるものにして、大國の交際は素より小國の書面に同じからず、外交機關の擴張は自然の歎にして、體て費用の支出も多からざると得ず、苟も擴張の如何に注目するものならんには、一點の疑問の如き何れも、外交の擴張と共に增加せざるを専ら分り切る事柄なるに然るに、今回衆議院の審算にて、外務省の如き何れも、外務省の所管に付く在外公使の經費に屬するものなれど、それは公然の經費にして、更に論く可らず、首肯可らざるの費用なきを得ず、所謂機密費なるものにして、是れ又外交の擴張と共に増加せざるを専ら分り切る事柄なるに然るに、今回衆議院の審算にて、外務省の所管に付く在外公使の經費は、粗ほ原集に決しながら、機密費に至りては、八萬圓の中より二萬圓を減じたり如何なる理由なるや、外務の機密費は、從來六萬圓のものを、政府の豫算に僅に二萬圓を増して八萬圓と爲したるさへ我輩の感服せざる所にして、戰勝の國勢より見れば、六を八に増したるのみにて、果して、實際の必要に應するみとを得べきや否や甚だ覺束なく思ふ所なれども、當局者自身の參議にして、自から見込もかるみとならん、専外より入らざる世話は無益なれども、豫算會にて其八萬圓は、最も減じたるは如何なる心得ぞや、軍備の計畫と云ひ、各種の事業と云ひ、政府の發臺に賛成して、實際に財政の膨脹を致したるは戰後の經費云々の事實を認めたるが爲めに、外ならず議院の報が衆口一様に同意を唱へたる其口にて、單に外交の機密費に削減を加へたるは到底本氣の沙汰とは見る可らずして、只人に對する感情の一點に過ぎざる可し即ち、其輩の心事を尋ねれば、今の外務の當局者は、大隈なり、大隈なるが故に、減じたりと云ふの外に、理由はなきみとならん、大隈に對して不平あらんには、當人の一身に向て攻撃を逞うす可し、敢て怪しむに足らずと雖も、外交は日本の外交にして、大陸の外交に非ず、日本の帝國議會が、日本の外交費を議するに當局者に對する感情の一點よりして、漫に削減を試むとするは、抑も如何なる考なるや、或は全く外交の現状をも解せざる輩が斯る無知の説を爲すとあれど、只據て可きのみなれども、戰後の諸計畫は勿論、現に外國費の中にも、在外公館の經費の如きは、ば原集を認ぬながら、單に機密費を減するは、其心事の所在自から明白にして、感情の爲めに國事を弄ぶものと云はるゝも、辯解の辭は、わる可らず、外交家として、當局者の無能を認めたるには、正面より攻撃して職を去らしむる可なり又、當人の平素に横風賀洋の氣風を快からずとならば、一身に就て其舉動を非難するも差支なしと雖も事、茲に出でず、實際に外交擴張の實とは認めながら、其機關の運轉に必要な機密費に削減を加へ、大切な國事と自家の感情の犠牲に供して、自から喜ぶが如き、殆も、劣の舉動にして、我輩の飽く迄も憤斥する所なり、查定案は、單に委員會の議決にして、衆議の本旨に於て果して之を容るゝや否やは、知る可らず思ふに議會の多数に、の議會は勿論、一般の國民も、甚しく議員を小兒視して、是も、いかと置かざるに至る可し、我がの断じて取らざる所なり

○赦免者懺悔談 (十一)

窃盜四犯刑期三年六個

夫れから右川嶋で苦役に就てその中漁期になつて放免になりましたが監視があるので其執行を受ける積りになりましたから何うしても仕方がありません、その前の罪と申すは下谷南船橋町泉橋警察署長さんのた養のねからモウ一箇處は本郷の大學校の長をして居る人のね部と云ふ男が私と一緒に市ヶ谷監獄署に居りまして只今では別に役付と云ふ者はムリませんが其時分は二人とも傳告請工と云ふ役付をして居つて同役でありました放免になりましてから私が下谷の佐竹の原で成る牛屋から何の氣なしに下りて来ますとバタたり其平田に会見すばらしい服装をして居るから分るまいが貴方市出遇つた、其時平田は小供を背負つて歸い風をして居りましたが私を見ると「貴方は誰様ではないか私はいやうな始末ですが今本郷に居ります」「本郷は何處ですか」「千駄木町に居りますが小供が四人もあるし今は其日の活計にも困るほせです」と申しましたが成ヶ谷でね目に懸つた半五郎でござんす」と云ふ「左様程實に見すばらしい着物を着て小供を背負つて居る、其時は夕方で小供は腹減つて泣出すと云ふやうな始末私も可哀想になりましたから只今私は半屋で飲んで來たから牛は何だが何處か往きませう」夫れから天歎屋へ連れて往つて其男に酒を呑れたり天歎屋と子供に食はしたりして色々な談話を開いたが餘程困つて居る容子「さう云ふ際なら兎に角貴方の處に往つて見やう」「来て聞いても愧しいやうな處だから止して呉れ」と云ふから「なむに何んな處でも宜い往つて來たから牛は何だが何處か往きません、内儀さんは子供を泣かしながら消盡の中へ火を起して暖つて居た夫れで半五郎の肩ふには「喰ふみどり何も出んかと云つたら古毛布一枚しかござりません、内儀さんは毎日は隠れて死なうか、明日は死なうかと毎日思つて居る始末と云ふそんで私が出遇つたもんですから一什一伍の談話と聞いて右半五郎の案内で剣頭工科大學の校長さんの家のへ往く事になつた、

られた前は先へ歸り、下谷南稻荷町に身代をさうか斯うか長い着物の校長さんの家と和室になつて居りました。壁に貼けたらガラスで私を喰つて了はうとしたが其時は旨く取れなかつて居たので奥へなつて居りました。壁に貼けたらガラスで私がないから直接火を拈り切つて中を捜しました。まだ思つて隔山鳥籠燈を點けて見ます。是ればかりでは仕方や銅貨を取隠せて丁度から奥さんの筆筒として出ました。先方でもましたがなかへとこまし、忍入るときは如何にや難様で大凡分る、其答案、それは戸を些ど似して一搜してある難んで落とす、手間も入る位に貼つて這入ります。でも這入れます、斯くの如きへ又問は如何にや